

# 「キレル」現象に関する中学生の解釈・状態の分析

Analysis of junior high school students' interpretation and condition of "Kireru" phenomenon

長 櫓 涼 子\*

## Abstract

The purpose of this study was to analyze junior high school students' interpretation and condition of "Kireru" phenomenon.

A questionnaire was conducted to 657 students concerning their own experiences of "Kireru" phenomenon.

The results showed that the junior high school students interpreted "Kireru" phenomenon as "losing control", "anger" or "aggression". They also demonstrated that "Kireru" phenomenon was connected to students' condition such as "violent language", "aggression" and "losing control".

**キーワード：**中学生、「キレル」現象、解釈と状態について

## 問題と目的

「キレル」現象が中学生を中心に社会問題化した経緯には、1998年に栃木県黒磯市で発生した教師刺殺事件が挙げられる（斎藤 1999、正高 2001）。これは、当時中学1年生だった男子生徒が休み時間に女性教諭を刃物で刺し、警察に通報された事件である。被害を受けた女性教諭は、約10センチのナイフで胸や足など数ヶ所を刺されて死亡した。事件はマスメディアで大きく取り上げられ、「キレル」現象と関連づけて報道された。これがきっかけで、「キレル」現象は思春期の問題のひとつとして扱われるようになり、中学生を対象とした研究（大石 1998・1999、下坂ほか 2000、小林 2002、牧田・阪・田中 2000・2002、牧田 2006）が報告されるようになった。

しかし中学生の「キレル」現象の研究は異なる側面からの多様な定義のために、現象の特徴が一様に把握し辛くなっている。現に「キレル」現象に関する先行研究では、各研究者が個別に現象を捉えており、それぞれの研究の関連性が検討されていないことや（田中・東野 2003）、必ずしも定義に同じ側面が含まれていないという問題（和田 2003）が指摘されている。従って、中学生を対象とした「キレル」現象の研究を行う上で、まず定義を明確にしておく

必要がある。

大石（1998）によると、「キレル」とは一般的に思春期の子ども達の間で、「怒りで自分がコントロールできなくなる」という意味で使われる。また、牧田・阪・田中（2002）は「周囲のものが予想しにくい状況で突発的、衝動的に怒りが表出されることであり、どちらかといえば苦痛の感情によって生じる現象」と定義した。このことから、「キレル」現象の根底には、怒りや苦痛の感情といった一般に否定的と捉えられる情動状態が関与することが明らかである。

更に、下坂ほか（2000）は中学生の「キレル」現象を「あることを契機に自己の衝動性を統制できなくなって起こす行動」としており、この現象が行動化されるまでの過程には、衝動性の要因も関連していると言えよう。これは、先の牧田・阪・田中（2002）の定義にも共通する。

そして、他人に危害を加えようとする意図的意思を伴う一般的な攻撃行動と異なり、実際にキレた時の状態では衝動性がコントロールできず攻撃の際の意図的意思が働かないのが特徴である（田中・東野 2003）。そのため常軌を逸した攻撃行動が起こりやすく、場合によってはキレた状態の前後の記憶が乖離することもあるとされる（田中・東野 2003）。このような「キレル」現象について、小林（2002）は

\* Ryoko NAGARO 大学院研究員  
〈審査論文〉2010.7.13 受稿 2010.9.30 受理

「衝動的に暴力行為を行い、その後何もなかったかのような行動をとる」現象としている。つまり、キレた時は自己調整機能が十分に機能していない状態で攻撃性が意図的意思とは無関係に生じていると言える。

以上のことから本研究では、「キレル」現象を「怒りや苦痛の感情など強い否定的情動反応を伴い、自己調整機能の働きが阻害されることで意図的意思とは無関係に突発的・衝動的に攻撃性が出現する現象」と定義する。

但し、本研究の定義はこれまでの先行研究より導き出したものであり、「キレル」現象の実態については実証的データに基づいて検証する余地がある。そのため本研究において、中学生は「キレル」現象をどのように解釈しているのか、また彼らにとって、どのような状態になることが「キレル」ことなのかを明らかにすることは意義がある。

過去に長槽（2008）は関西圏の小学生を対象に、「キレル」現象に関する児童の解釈および状態について研究を実施している。これによると、児童は「キレル」現象を否定的な感情である「怒り」や、混乱、パニックを意味する「自己制御不能」、人や物への攻撃を意味する「攻撃性」に関連づけて解釈することが多かった。更にキレた時の状態は、人への暴力や物の破壊に代表される「攻撃の状態」、怒鳴る、暴言を吐くなどの「言動の変化」、混乱や興奮状態といった「自己制御不能状態」に陥りやすいという特徴が明らかにされた。そして発達段階の違いによって、キレた時の状態に性差が出ることが考察され、女子は「キレル」現象が心身の健康に影響を及ぼす可能性が高く、男子はキレを表現する術を身につける段階にないため、我慢をする傾向が見られた。

本研究では、「キレル」現象の実態を明確にするために、長槽（2008）の研究を参考に①中学生が「キレル」現象の意味をどう解釈しているのか、②中学生自身が「自分はキレた」と判断する時どのような状態が生起するのかを調査する。また、長槽（2008）の研究では、「キレル」現象は思春期以降に心身に影響を及ぼすことが予想されていることから、③「キレル」現象の発達の差異を学年と性別の観点から分析し、「キレル」現象が心身に及ぼす影響についても検討したい。

## 方法

### （1）調査方法

質問紙法による調査を実施した。

### （2）調査協力者の抽出方法

長槽（2008）の調査では、関西圏の小学校の協力のもと、児童の「キレル」現象に関する解釈や状態の分析を行っている。本研究も関西圏の教育委員会を通じて、調査の趣旨に賛同して頂いたK市のA公立中学校に協力を得ることができた。当初は別の中学校にも協力を依頼したが、最終的に協力を得ることができたのがこのA中学校であった。本研究の調査協力者は、長槽（2008）の研究で協力を得た小学校とは学区が異なるが、距離的にあまり離れていない同じ市内で協力を仰ぐよう配慮した。

### （3）調査協力者

質問紙調査に協力して頂いた生徒は657名で、有効回答数は618名（94.0%）であった。内訳を以下に示す。

中学1年生：男子 85名、女子 94名、計179名

平均 12.63歳 SD 0.48

中学2年生：男子 119名、女子 118名、計237名

平均 13.64歳 SD 0.47

中学3年生：男子 92名、女子 110名、計202名

平均 14.69歳 SD 0.46

### （4）質問紙の内容

長槽（2008）の調査を参考に、以下の質問項目を作成し実施を試みた。

①「キレル」現象の意味について：全ての生徒を対象に、各個人がイメージする「キレル」という言葉の意味を自由記述で回答してもらった。

②キレル頻度について：下坂ほか（2000）は、中学生を対象にキレル頻度についての調査を実施している。長槽（2008）の調査では、下坂ほか（2000）を参考に、日常におけるキレル頻度について、「1.私は、一度もキレたことがない」、「2.私は、今までに何回かキレたことがある」、「3.私は、月に1～2回はキレル」、「4.私は、週に何回かキレル」、「5.私は、毎日のようにキレている」までの5項目を作成している。今回の中学生を対象にした調査も、この5項目を使用した。回答形式は全ての生徒を対象に、5項目の中から自分に最も当てはまる項

目を選択してもらう単一回答形式とした。

③キレた時の状態について：②の質問で「2. 私は、今までに何回かキレたことがある」～「5. 私は、毎日のようにキレている」のいずれかに該当した生徒をキレた体験がある者と判断し、該当者にはキレた時の状態について自由記述による回答を求めた。

#### (5) 調査実施期間

2005年9月下旬から10月初旬にかけて実施。

#### (6) データ分析の方法

分析方法は長櫓（2008）と同様である。以下にその手順を記す。

①「キレル」現象の意味について：和田（2003）の分析方法を参考に、回答者から得られた自由記述は理解可能な範囲で最小単位の意味要素に区切り、内容が類似しているものをまとめてカテゴリー化した。更に各カテゴリーをコード化し、学年×カテゴリー、性別×カテゴリーのクロス集計により度数および相対度数を求めた。そして学年差および性差の検討のための $\chi^2$ 検定を行った。

②キレル頻度について：学年×キレル頻度、性別×キレル頻度のクロス集計を行い、「2. 私は、今までに何回かキレたことがある」～「5. 私は、毎日のようにキレている」と回答した者を抽出した。

③キレた時の状態について：キレた体験がある生徒を対象にした自由記述を①の分析方法と同様に、理解可能な範囲で最小単位の意味要素に区切り、内容が類似しているものをまとめ、カテゴリー化した。各カテゴリーはコード化し、学年×カテゴリー、性別×カテゴリーのクロス集計で度数および相対度数を求めた。そして学年差および性差の検討を行った。

### 結果と考察

#### (1) 「キレル」現象の意味について

指導教授および心理学に精通した大学院生（3名以上）にカテゴリー内容の整合性を確認してもらいながら、自由記述の内容を分類した。その結果、9種類のカテゴリーに分類することができた（表1）。このカテゴリーには「怒り」や「ムカつき」、「イライラ」といった「キレル」現象に至るまでの否定的な情動状態も含まれ、長櫓（2008）とほぼ同じカテゴリーが出現した。

長櫓（2008）の児童を対象とした調査では、「キレル」という言葉の意味自体が分からないという回答が見られたが、今回の調査ではそのような回答カテゴリーは無かった。従って、「キレル」という言葉は中学生にとってごく身近であると言える。

表1 「キレル」現象の意味に関するカテゴリーと記述内容

コード	カテゴリー	内 容
1	怒り	怒る、頭に血がのぼる、カッとなるなどの記述
2	自己制御不能	自分をコントロールできなくなる、混乱、パニックなどの記述
3	攻撃性	人・物への暴力行為、破壊衝動などに関する記述
4	言語攻撃	人への暴言、悪口、文句などの言語攻撃に関する記述
5	ムカつき	ムカつき（癢にさわって腹が立つ、吐き気）に関する記述
6	イライラ	苛立ちに関する記述
7	体調変化	ストレス、気分が悪くなるなどの不快感に関する記述
8	意欲低下	やる気の低下、自己世界への逃避に関する記述
9	その他	どのカテゴリーにも分類不可能だった記述

#### ①カテゴリーの出現順位と学年差

学年×カテゴリーのクロス集計の結果を表2に示す。また各学年におけるカテゴリーの出現順位は図1の通りである。

1年生のカテゴリーの出現順位は、1位「自己制御不能」110件（31.3%）、2位「攻撃性」102件（29.1%）、3位「怒り」67件（19.1%）であった。2年生では、1位「怒り」98件（30.3%）、2位「自己制御不能」94件（29.1%）、3位「攻撃性」66件（20.4%）である。3年生も1位「怒り」102件（27.3%）、2位「自己制御不能」96件（25.7%）、3位「攻撃性」83件（22.2%）であった（表2および図1）。

以上の結果から、中学生は「キレル」現象を怒りの情動や自己制御機能の働きと関連づけており、人や物への暴力行為や破壊衝動などの攻撃性が伴うと解釈していることが明らかとなった。

更に $\chi^2$ 検定の結果、各カテゴリーで有意な学年差が確認された（ $\chi^2(16)=54.817, p<.01$ ）。残差分析の結果、1年生は「キレル」現象を人や物への暴力行為や破壊衝動などに関する「攻撃性」（ $p<.01$ ）と解釈する回答が他学年に比べ高かった。

表2 中学生の「キレる」現象の解釈に関するクロス集計表

カテゴリー			怒り	自己制御不能	攻撃性	言語攻撃	ムカつき	イライラ	体調変化	意欲低下	その他	合計
1 年生	男子	度数	31	53	42	10	4	0	0	2	7	149
		性別の%	20.8%	35.6%	28.2%	6.7%	2.7%	0.0%	0.0%	1.3%	4.7%	100.0%
		調整済み残差	0.7	1.5	-0.3	-2.0	-0.7	0.0	0.0	-1.2	0.6	
	女子	度数	36	57	60	27	8	0	0	7	7	202
		性別の%	17.8%	28.2%	29.7%	13.4%	4.0%	0.0%	0.0%	3.5%	3.5%	100.0%
		調整済み残差	-0.7	-1.5	0.3	2.0	0.7	0.0	0.0	1.2	-0.6	
	小計	度数	67**	110	102**	37	12	0**	0*	9	14	351
		学年の%	19.1%	31.3%	29.1%	10.5%	3.4%	0.0%	0.0%	2.6%	4.0%	100.0%
		調整済み残差	-3.4	1.4	2.8	0.7	0.1	-3.1	-2.1	1.1	-0.4	
2 年生	男子	度数	44	47	40**	4**	4	0**	0	2	10	151
		性別の%	29.1%	31.1%	26.5%	2.6%	2.6%	0.0%	0.0%	1.3%	6.6%	100.0%
		調整済み残差	-0.4	0.8	2.5	-2.9	-0.7	-2.5	0.0	0.7	0.1	
	女子	度数	54	47	26**	19**	7	7**	0	1	11	172
		性別の%	31.4%	27.3%	15.1%	11.0%	4.1%	4.1%	0.0%	0.6%	6.4%	100.0%
		調整済み残差	0.4	-0.8	-2.5	2.9	0.7	2.5	0.0	-0.7	0.0	
	小計	度数	98*	94	66†	23†	11	7	0*	3	21*	323
		学年の%	30.3%	29.1%	20.4%	7.1%	3.4%	2.2%	0.0%	0.9%	6.5%	100.0%
		調整済み残差	2.4	0.2	-1.8	-1.8	0.1	0.6	-2.0	-1.5	2.2	
3 年生	男子	度数	39	34	32	8*	3	0**	3	0*	7*	126
		性別の%	31.0%	27.0%	25.4%	6.3%	2.4%	0.0%	2.4%	0.0%	5.6%	100.0%
		調整済み残差	1.1	0.4	1.1	-2.0	-0.6	-2.5	0.0	-2.0	2.1	
	女子	度数	63	62	51	33*	9	12**	6	8*	4*	248
		性別の%	25.4%	25.0%	20.6%	13.3%	3.6%	4.8%	2.4%	3.2%	1.6%	100.0%
		調整済み残差	-1.1	-0.4	-1.1	2.0	0.6	2.5	0.0	2.0	-2.1	
	小計	度数	102	96†	83	41	12	12**	9**	8	11†	374
		学年の%	27.3%	25.7%	22.2%	11.0%	3.2%	3.2%	2.4%	2.1%	2.9%	100.0%
		調整済み残差	1.0	-1.6	-1.0	1.1	-0.2	2.5	4.0	0.4	-1.7	
合計	度数	267	300	251	101	35	19	9	20	46	1048	
	学年の%	25.5%	28.6%	24.0%	9.6%	3.3%	1.8%	0.9%	1.9%	4.4%	100.0%	

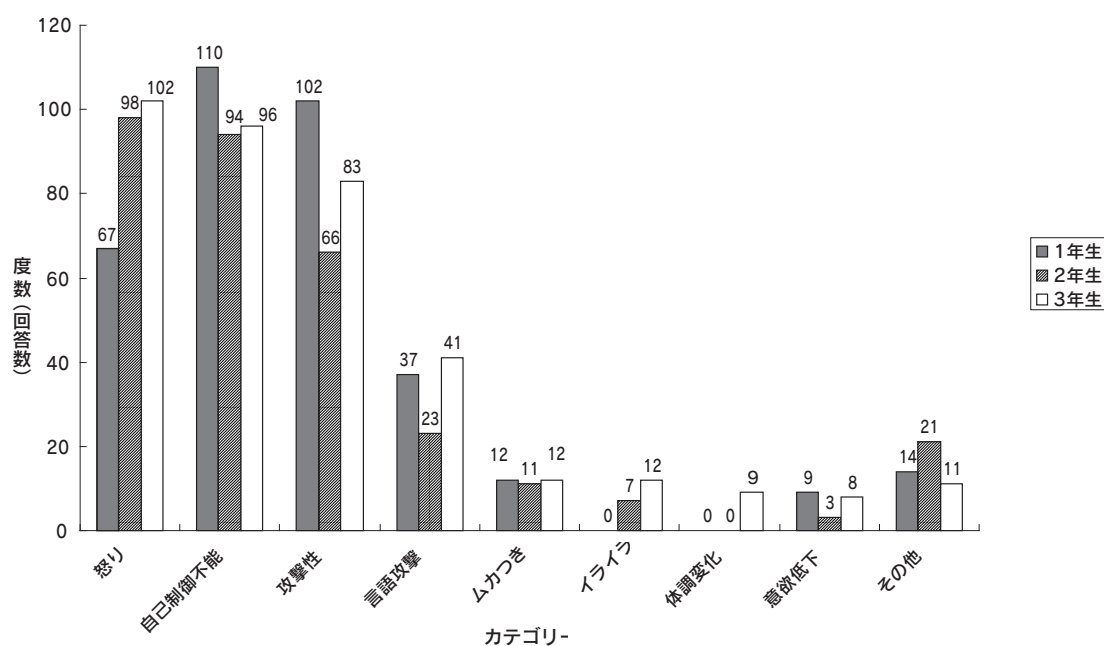
†  $p < .10$ \*  $p < .05$ \*\*  $p < .01$ 

図1 学年別「キレる」現象の解釈

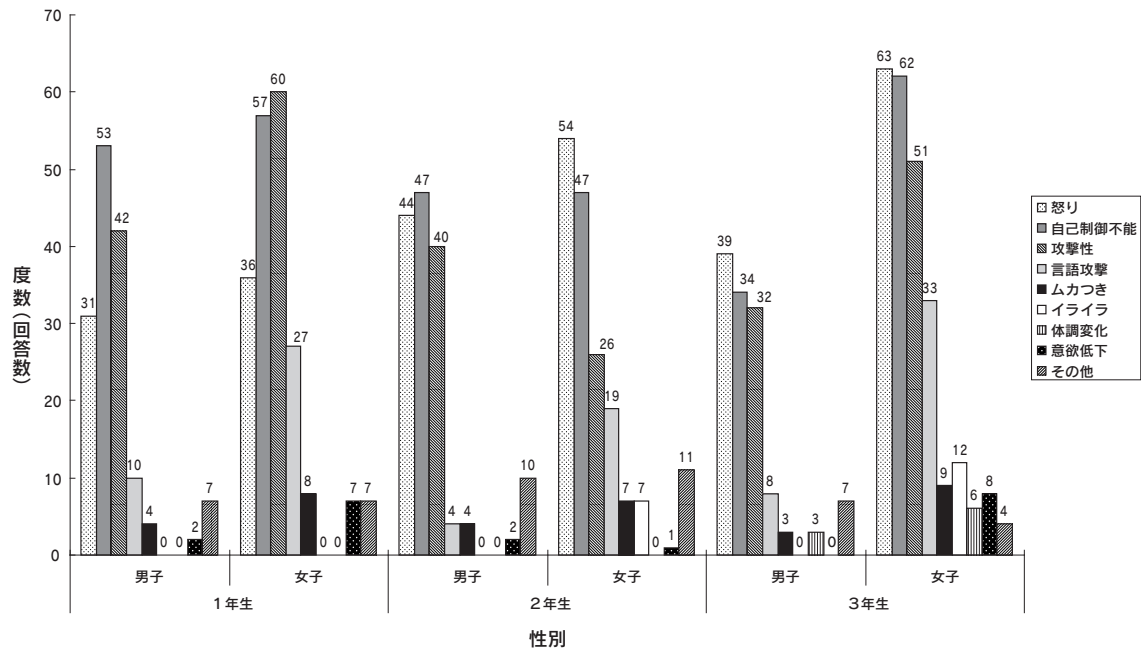


図2 性別による「キレル」現象の解釈

一方、カッとなって頭に血がのぼる「怒り」( $p<.01$ )や、苛立ちを意味する「イライラ」( $p<.01$ )、ストレスや体調不良に関する「体調変化」( $p<.05$ )を伴うと解釈する回答は他学年より低い。次に2年生は、「キレル」現象を「怒り」( $p<.05$ )と解釈する回答が高い一方、「攻撃性」( $p<.10$ )、暴言、悪口や文句などの「言語攻撃」( $p<.10$ )と解釈する回答は他学年より低い。そして3年生は「キレル」現象を「イライラ」( $p<.01$ )、「体調変化」( $p<.01$ )と解釈する回答が他学年より高く、「自己制御不能」( $p<.10$ )と解釈する回答は低かった(表2および図1)。つまり1年生は「キレル」現象を自らの身体を通して外的に発散する行為と解釈するのに対し、2年生や3年生では怒りや苛立ちなどの自己の内面で生じる情動興奮が心身に影響を及ぼす現象と解釈していることが明らかである。

長槽(2008)の研究では、児童は「キレル」現象を自己の内面で生じた情動興奮を身体で直接的に発散したり、言葉で間接的に発散する行為と解釈しており、これは外的な発散方法と言える。本研究では、「キレル」現象を外的発散方法と解釈する幼さは加齢と共に抑制され、情動興奮が心身に影響を及ぼすとの解釈に変わっていく。従って、中学生は「キレル」現象をより重く複雑に受け止め始める時期と言える。

## ②カテゴリーの出現順位と性差

性別×カテゴリーのクロス集計の結果を表2に示す。また性別によるカテゴリーの出現順位は図2の通りである。

1年生男子は、1位「自己制御不能」53件(35.6%)、2位「攻撃性」42件(28.2%)、3位「怒り」31件(20.8%)であった。女子は、1位「攻撃性」60件(29.7%)、2位「自己制御不能」57件(28.2%)、3位「怒り」36件(17.8%)である(表2および図2)。 $\chi^2$ 検定の結果に有意差がなく( $\chi^2(6)=7.792$ ,  $p=n.s$ )、全てのカテゴリーに性差は無かった(表2)。

2年生男子の場合、1位「自己制御不能」47件(31.1%)、2位「怒り」44件(29.1%)、3位「攻撃性」40件(26.5%)であった。女子は、1位「怒り」54件(31.4%)、2位「自己制御不能」47件(27.3%)、3位「攻撃性」26件(15.1%)である(表2および図2)。 $\chi^2$ 検定に有意差があり( $\chi^2(7)=20.694$ ,  $p<.01$ )、男子は「キレル」現象を「攻撃性」に関連づけて解釈することが女子より高く( $p<.01$ )、女子は「イライラ」( $p<.01$ )や「言語攻撃」( $p<.01$ )に関連づけて解釈することが男子より高かった(表2および図2)。

3年生男子は、1位「怒り」39件(31.1%)、2位「自己制御不能」34件(27.0%)、3位「攻撃性」32件(25.4%)であった。女子も同様に、1位「怒り」

表3 中学生の「キレル」頻度に関するクロス集計表

カテゴリー			一度もキレた ことがない	今までに何回か キレたことがある	月に1～2回は キレル	週に何回か キレル	毎日のように キレている	合計
1年生	男子	度数	19	45	12	6	3	85
		性別の％	22.4%	52.9%	14.1%	7.1%	3.5%	100.0%
		調整済み残差	－1.9	1.5	0.3	－0.4	0.6	
	女子	度数	33	39	12	8	2	94
		性別の％	35.1%	41.5%	12.8%	8.5%	2.1%	100.0%
		調整済み残差	1.9	－1.5	－0.3	0.4	－0.6	
	小計	度数	52	84	24	14	5	179
		学年の％	29.1%	46.9%	13.4%	7.8%	2.8%	100.0%
		調整済み残差	2.0	－0.6	－0.7	－0.7	－0.5	
2年生	男子	度数	29	61	15**	7†	7†	119
		性別の％	24.4%	51.3%	12.6%	5.9%	5.9%	100.0%
		調整済み残差	1.2	1.0	－2.2	－1.6	1.7	
	女子	度数	21	53	28**	14†	2†	118
		性別の％	17.8%	44.9%	23.7%	11.9%	1.7%	100.0%
		調整済み残差	－1.2	－1.0	2.2	1.6	－1.7	
	小計	度数	50	114	43	21	9	237
		学年の％	21.1%	48.1%	18.1%	8.9%	3.8%	100.0%
		調整済み残差	－1.2	－0.3	1.8	－0.1	0.4	
3年生	男子	度数	27	46	9	9	1	92
		性別の％	29.3%	50.0%	9.8%	9.8%	1.1%	100.0%
		調整済み残差	2.2	－0.4	－1.0	－0.3	－1.7	
	女子	度数	18	58	16	12	6	110
		性別の％	16.4%	52.7%	14.5%	10.9%	5.5%	100.0%
		調整済み残差	－2.2	0.4	1.0	0.3	1.7	
	小計	度数	45	104	25	21	7	202
		学年の％	22.3%	51.5%	12.4%	10.4%	3.5%	100.0%
		調整済み残差	－0.6	0.9	－1.2	0.8	0.1	
合計		度数	147	302	92	56	21	618
		学年の％	23.8%	48.9%	14.9%	9.1%	3.4%	100.0%

†  $p < .10$ \*  $p < .05$ \*\*  $p < .01$ 

り」63件 (25.4%)、2位「自己制御不能」62件 (25.0%)、3位「怒り」51件 (20.6%)であった (表2および図2)。 $\chi^2$ 検定に有意差があり ( $\chi^2(8) = 20.623$ ,  $p < .01$ )、「キレル」現象を「イライラ」( $p < .01$ )、やる気の低下や自己世界への逃避を意味する「意欲低下」( $p < .05$ )、「言語攻撃」( $p < .05$ )と解釈するのは女子に多かった (表2および図2)。

以上の結果から、学年を軸とした発達に伴い、解釈の仕方に徐々に性差が出てくることが示された。長槽 (2008) の研究でも児童の「キレル」現象に関する解釈の仕方に性差が無かったことから、本格的に性差が現れるのは中学生以降と判断できる。

具体的には、男子は「キレル」現象を攻撃性と関連づけて外的な発散方法と解釈している。そして一方の女子は、「キレル」現象について自己の内面に生じた情動的な苛立ちを言葉で発散する行為と解

釈している。更に意欲低下と関連づけて解釈していることから、女子は自己の苛立ちを言葉で発散できない場合は、やる気が低下するなどの状態が見られることが推察される。

## (2) キレル頻度について

クロス集計の結果を表3に示す。「2.私は、今までに何回かキレたことがある」～「5.私は、毎日のようにキレている」に該当する生徒を「キレル」現象の体験者とし、実際にキレた時どのような状態になったのかを自由記述で回答してもらった。

## (3) キレた時の状態について

指導教授および大学院生 (3名以上) にカテゴリー内容の整合性を確認してもらいながら、自由記述の内容をカテゴリーに分類していった。その結

表4 キレた時の状態に関するカテゴリーと記述内容

コード	カテゴリー	内 容
1	言動の変化状態	“怒鳴る、言葉づかいが悪くなる、人への暴言・悪口・文句・無視などに関する記述”
2	攻撃的状态	人・物への暴力行為、破壊衝動などに関する記述
3	自己制御不能状態	混乱状態、興奮状態、制御不能状態に関する記述
4	悲観的状态	悲しみ、泣き行動に関する記述
5	怒りの状態	腹が立つ、怒る、カッとなるなど怒りに関する記述
6	体調変化の状態	ストレス、頭痛、食欲低下、顔や体が熱くなるなどの記述
7	意欲低下状態	やる気の低下、自己世界への逃避に関する記述
8	イライラ状態	苛立ちに関する記述
9	ムカつき状態	ムカつき(癪にさわれて腹が立つ、吐き気)に関する記述
10	我慢の状態	自分の気持ちを抑え込もうとする、我慢などの記述
11	その他	どのカテゴリーにも分類不可能だった記述

果、11種類のカテゴリーに分類することができた(表4)。これは長櫓(2008)と同じカテゴリーで、「キレル」現象は「悲観的状态」や「怒りの状態」、「イライラ状態」、「ムカつき状態」などの強い否定的情動状態を伴うことが明らかとなった。

#### ①カテゴリーの出現順位と学年差

学年×カテゴリーのクロス集計の結果を表5に示す。また各学年におけるカテゴリーの出現順位は図3の通りである。

1年生のカテゴリー出現順位は、1位「攻撃的状态」83件(32.2%)、2位「言動の変化状態」73件(28.3%)、3位「自己制御不能状態」33件(12.8%)であった。2年生は、1位「言動の変化状態」88件(31.8%)、2位「攻撃的状态」66件(23.8%)、3位「自己制御不能状態」57件(20.6%)であった。3年生は、1位「言動の変化状態」93件(33.8%)、2位「攻撃的状态」77件(28.0%)、3位「自己制御不能状態」30件(10.9%)であった(表5および図3)。従って、実際に「キレル」現象を体験した生徒は、自己調整機能の働きが低下し、相手に暴言を吐いたり怒鳴ったりするなどの言動や、人や物への暴力行為が起きたと言える。

また $\chi^2$ 検定の結果、各カテゴリーで有意な学年差が確認された( $\chi^2(20)=41.435$ ,  $p<.01$ )。残差

分析の結果より、1年生は他学年に比べ、キレた時に癪にさわれて腹が立つような「ムカつき状態」( $p<.05$ )に陥りやすく、人や物への暴力行為や破壊衝動に関わる「攻撃的状态」( $p<.05$ )が起きやすい。2年生では、「攻撃的状态」( $p<.05$ )や「ムカつき状態」( $p<.05$ )は他学年に比べ有意に低くなるが、混乱や興奮状態になり自己調整機能が働かなくなる「自己制御不能状態」( $p<.01$ )を起しやすくなる。更にはストレスや頭痛、食欲低下を訴える「体調変化の状態」( $p<.05$ )も起しやすい。そして3年生になると、「自己制御不能状態」( $p<.05$ )や、やる気の低下や自己世界の逃避に関する「意欲低下状態」( $p<.10$ )は他学年より低くなってくる。その一方で、自己の悲しみを訴えて泣くなどの「悲観的状态」( $p<.10$ )や、自分の気持ちを押さえ込もうとする「我慢の状態」( $p<.05$ )になる傾向が他学年に比べ有意に高い(表5および図3)。

つまり、年齢が低いうちはキレた時に自己の内面で生じた情動興奮を体で直接周囲へ発散しているが、発達に伴い情動興奮は内面に抑圧されていく。そして抑圧された情動が心身に影響を及ぼし、悲しみとなって現れたり、自分の気持ちを抑え込もうとする行動に現れると言える。これらは苦痛の感情を伴い、一見キレたと判断が付きにくいことから見過ごされることも多い。しかし悲しみを訴えようとする行為や、気持ちを抑え込もうとする仕草など、何らかの予兆が見られるはずである。周囲が予兆を見逃さず、早期に対応することが必要であろう。

#### ②カテゴリーの出現順位と性差

性別×カテゴリーのクロス集計の結果を表5に示す。また各学年におけるカテゴリーの出現順位は図4の通りである。

1年生男子は、1位「攻撃的状态」38件(33.3%)、2位「自己制御不能状態」24件(21.2%)、3位「言動の変化状態」23件(20.2%)である。女子は、1位「言動の変化状態」50件(34.7%)、2位「攻撃的状态」45件(31.3%)、3位「意欲低下状態」11件(7.6%)であった(表5および図4)。 $\chi^2$ 検定の結果に有意差があり( $\chi^2(9)=36.331$ ,  $p<.01$ )、男子は「怒りの状態」( $p<.01$ )と「自己制御不能状態」( $p<.01$ )が女子よりも有意に高い。一方、女子は「イライラ状態」( $p<.05$ )と「言動の変化状態」( $p<.01$ )が男子より有意に

表5 中学生のキレた時の状態に関するクロス集計表

カテゴリー			言動の 変化状態	攻撃的 状態	自己制御 不能状態	悲観的 状態	怒りの 状態	体調変化 の状態	意欲低下 状態	イライラ 状態	ムカつき 状態	我慢の 状態	その他	合計
1年生	男子	度数	23**	38	24**	3	13**	2	4	0*	3	0	4	114
		性別の%	20.2%	33.3%	21.1%	2.6%	11.4%	1.8%	3.5%	0.0%	2.6%	0.0%	3.5%	100.0%
		調整済み残差	-2.6	0.4	3.5	0.3	3.4	-1.1	-1.4	-2.4	-0.9	0.0	0.3	
	女子	度数	50**	45	9**	3	2**	6	11	7*	7	0	4	144
		性別の%	34.7%	31.3%	6.3%	2.1%	1.4%	4.2%	7.6%	4.9%	4.9%	0.0%	2.8%	100.0%
		調整済み残差	2.6	-0.4	-3.5	-0.3	-3.4	1.1	1.4	2.4	0.9	0.0	-0.3	
	小計	度数	73	83*	33	6	15	8	15	7	10*	0	8†	258
		学年の%	28.3%	32.2%	12.8%	2.3%	5.8%	3.1%	5.8%	2.7%	3.9%	0.0%	3.1%	100.0%
		調整済み残差	-1.3	1.9	-1.1	-0.5	1.2	-0.8	1.2	0.3	2.0	-1.2	-1.7	
2年生	男子	度数	25**	26	39**	0*	5	9	2*	1	2	0	7	116
		性別の%	21.6%	22.4%	33.6%	0.0%	4.3%	7.8%	1.7%	0.9%	1.7%	0.0%	6.0%	100.0%
		調整済み残差	-3.1	-0.5	4.6	-1.9	0.2	1.2	-2.1	-1.3	0.9	0.0	1.5	
	女子	度数	63**	40	18**	5*	6	7	12*	5	1	0	4	161
		性別の%	39.1%	24.8%	11.2%	3.1%	3.7%	4.3%	7.5%	3.1%	0.6%	0.0%	2.5%	100.0%
		調整済み残差	3.1	0.5	-4.6	1.9	-0.2	-1.2	2.1	1.3	-0.9	0.0	-1.5	
	小計	度数	88	66*	57**	5	11	16*	14	6	3*	0	11	277
		学年の%	31.8%	23.8%	20.6%	1.8%	4.0%	5.8%	5.1%	2.2%	1.1%	0.0%	4.0%	100.0%
		調整済み残差	0.2	-1.9	3.3	-1.1	-0.6	1.9	0.5	-0.4	-1.7	-1.3	-0.9	
3年生	男子	度数	25	28	12	0	5	3	1	1	2	0	4	81
		性別の%	30.9%	34.6%	14.8%	0.0%	6.2%	3.7%	1.2%	1.2%	2.5%	0.0%	4.9%	100.0%
		調整済み残差	-0.7	1.6	1.3	-2.2	1.2	0.5	-1.1	-0.9	0.2	-1.1	-1.1	
	女子	度数	68	49	18	11	6	5	7	6	4	3	17	194
		性別の%	35.1%	25.3%	9.3%	5.7%	3.1%	2.6%	3.6%	3.1%	2.1%	1.5%	8.8%	100.0%
		調整済み残差	0.7	-1.6	-1.3	2.2	-1.2	-0.5	1.1	0.9	-0.2	1.1	1.1	
	小計	度数	93	77	30*	11†	11	8	8†	7	6	3*	21**	275
		学年の%	33.8%	28.0%	10.9%	4.0%	4.0%	2.9%	2.9%	2.5%	2.2%	1.1%	7.6%	100.0%
		調整済み残差	1.1	0.0	-2.2	1.6	-0.6	-1.1	-1.6	0.1	-0.2	2.4	2.5	
合計		度数	254	226	120	22	37	32	37	20	19	3	40	810
		学年の%	31.4%	27.9%	14.8%	2.7%	4.6%	4.0%	4.6%	2.5%	2.3%	0.4%	4.9%	100.0%

†  $p < .10$   
 \*  $p < .05$   
 \*\*  $p < .01$

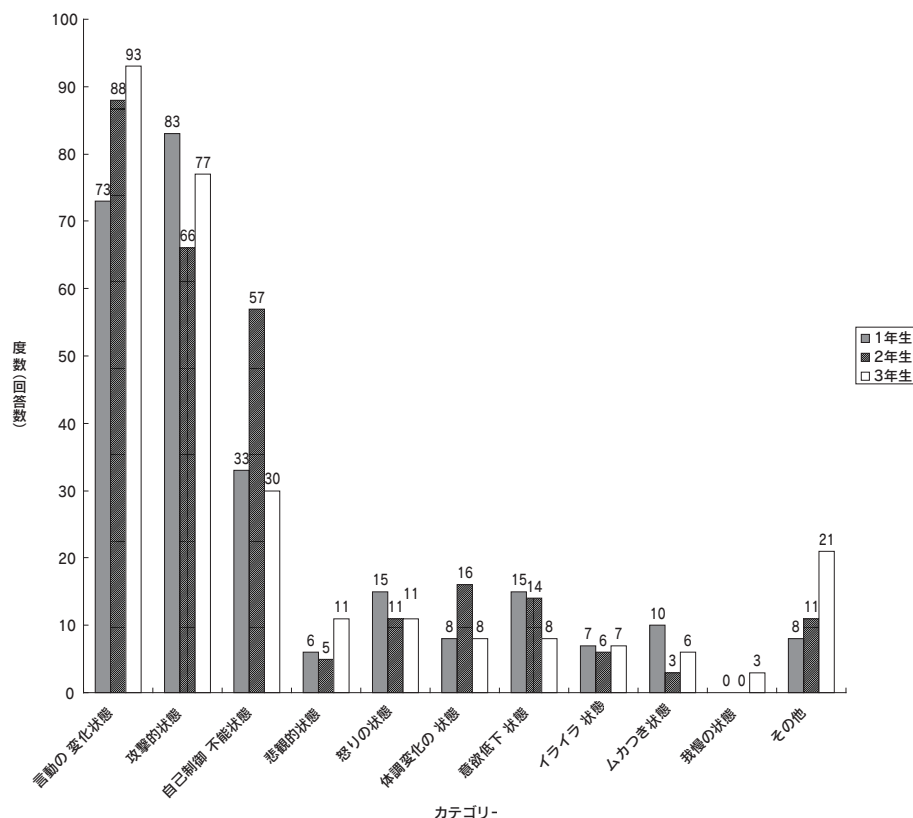


図3 学年別「キレた」時の状態



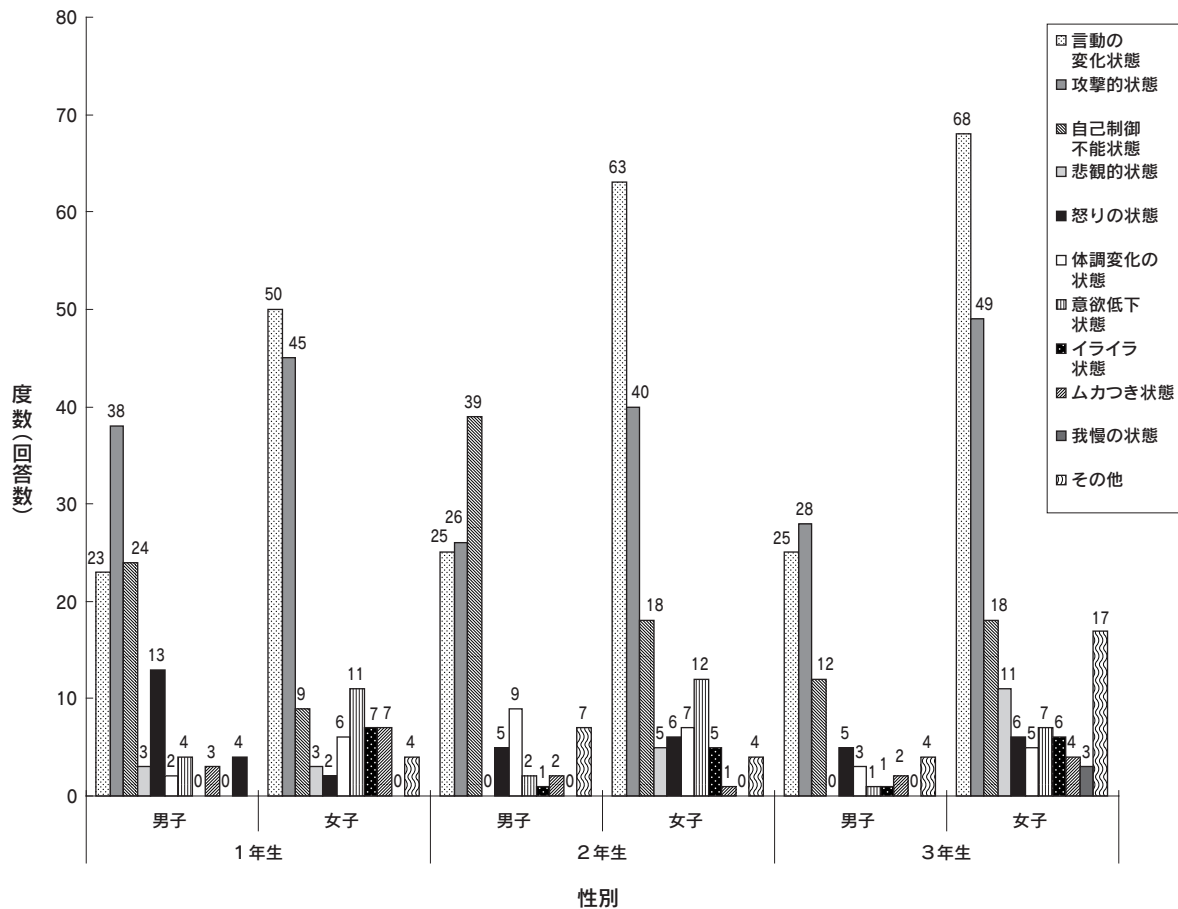


図4 性別による「キレル」時の状態

高い（表5および図4）。

2年生男子では、1位「自己制御不能状態」39件（33.6%）、2位「攻撃的状态」26件（22.4%）、3位「言動の変化状態」25件（21.6%）となった。女子は1位「言動の変化状態」63件（39.1%）、2位「攻撃的状态」40件（24.8%）、3位「自己制御不能状態」18件（11.2%）である（表5および図4）。 $\chi^2$ 検定の結果に有意差があり（ $\chi^2(9)=37.086$ ,  $p<.01$ ）、男子は「自己制御不能状態」（ $p<.01$ ）が女子に比べ有意に高い。女子の場合は、「悲観的状态」（ $p<.05$ ）や「意欲低下状態」（ $p<.05$ ）、「言動の変化状態」（ $p<.01$ ）が男子より高い（表5および図4）。

3年生男子は1位「攻撃的状态」28件（34.6%）、2位「言動の変化状態」25件（30.9%）、3位「自己制御不能状態」12件（14.8%）である。女子は1位「言動の変化状態」68件（35.1%）、2位「攻撃的状态」49件（25.3%）、3位「自己制御不能状態」18件（9.3%）である（表5および図4）。 $\chi^2$ 検定の結果には有意差が無く（ $\chi^2(10)=14.140$ ,  $p=n.s.$ ）、キレル時の状態に性別による違いは無かった（表5

および図4）。

以上の結果から、男子はキレル時に混乱や興奮状態を示し自己抑制ができなくなることや、腹を立て怒るなど身体で直接訴える発散方法が女子よりも多いと言える。それに対して女子は、キレル時に自己の内面の苛立ちを暴言や悪口、文句で外に発散する手段や、時には相手を無視する手段を男子よりも多く用いていることが明らかである。しかし女子の中には言葉で発散することよりも攻撃的な状態や混乱、興奮状態になる者もいる。また、悲しみからやる気を喪失し、自己世界へ逃避してしまうなど「キレル」現象が自己の内面に向かうこともある。

### まとめと今後の課題

本研究では、「キレル」現象を「怒りや苦痛の感情など強い否定的情動反応を伴い、自己調整機能の働きが阻害されることで意図的意思とは無関係に突発的・衝動的に攻撃性が出現する現象」と定義した。

そして①中学生が「キレル」現象の意味をどう解釈しているのか、②中学生自身が「自分はキレル」

と判断する時、どのような状態が生じし、③学年や性別の発達の差異によって、「キレル」現象が心身にどのような影響を及ぼしているのかを分析した。

その結果、中学生は「キレル」現象を「自己制御不能」になることや「怒り」、「攻撃性」に関連づけて解釈していた。更に「キレル」現象の解釈には学年差があり、年齢と共に「キレル」現象は自己の内面でより深く複雑に解釈されていく様子が明らかとなった。長槽(2008)の児童を対象とした研究では、「キレル」現象を外に向かって発散する児童特有の幼さが特徴的であったが、そのような傾向は徐々に抑制されると言えよう。そして「キレル」現象の解釈には性差が見られ、男子は「キレル」現象を攻撃性と関連づけていることが示され、女子は自己の内面に生じた情動的な苛立ちを言葉で発散することや、意欲低下と関連づけて解釈していることが示された。長槽(2008)の研究では「キレル」現象についての児童の解釈に性差が無かったことから、「キレル」現象の性差は中学生以降に顕著になることが明らかとなった。

また実際に「キレル」現象を起した生徒は、「言動の変化状態」や「攻撃の状態」、「自己制御不能状態」を多く体験していることが明らかとなった。キレた時の状態に学年差があり、自らの情動状態により混乱や攻撃を表出する方法は年齢と共に抑圧され、その一方で我慢をしたりストレスや頭痛などの体調変化や悲観的な状態を訴える生徒が多くなっていった。

加えて本研究ではキレた時の状態に性差があった。長槽(2008)の調査と比較すると、男子児童はキレを表現する術を持っておらず我慢をする傾向にあったが、中学生になると怒りや興奮を身体で直接訴える手段を示すようになる。一方の女子は、児童期では心身の健康に影響を及ぼす傾向にあったが、中学生になると自己の内面の苛立ちを言葉で表出するようになっていく。

先行研究においても、キレた時の性差について議論がなされており、男子の方がキレやすいという結果(富田 2002)がある一方で、女子の方がキレやすいという結果(牧田・阪・田中 2000、小林 2005)も報告されている。しかし、長槽(2008)の調査と今回の調査結果を総合的に考察すると、「キレル」現象は発達に伴って、その表現方法において性別による違いが出てくると言える。従って、中学生では性

別も考慮に入れて、キレた時の状態に合わせた心身のサポートを行っていく必要がある。

今後は、本研究で得られた「キレル」現象に関する中学生の解釈と状態の結果をもとに、定義をより精緻化し、現象の構造にも焦点を当てた研究を深めたい。

#### 参考文献

- 小林秀資(2002)「キレル子ども達に学ぶ『思春期における暴力行為の原因究明と対策に関する研究』に組んで―」『小児保健研究』61(4), 543-551頁。
- 小林正子(2005)「『キレル』に関する中高生の生活状況調査からの検討」『保健医療科学』54(2), 101-107頁。
- 牧田浩一・阪武彦・田中雄三(2000)「中学生の『むかつき』『キレル』現象に関する意識調査」『九州神経精神医学』46, (1-3), 189-195頁。
- 牧田浩一・阪武彦・田中雄三(2002)「『むかつき』『キレル』現象と攻撃性との関連性及び SCT(文章完成法テスト)の特徴」『九州神経精神医学』48(1), 15-27頁。
- 牧田浩一(2006)「『キレル』心性とトラウマ的体験との関連」『鳴門教育大学研究紀要』21, 77-82頁。
- 正高信男(2001)「『キレル』心と幼児体験」『心理学ワールド』14, 17-20頁。日本心理学会。
- 長槽涼子(2008)「『キレル』現象に関する高学年児童の解釈・状態の分析」『聖和大学論集』第36号 A, 235-244頁。
- 大石英史(1998)「“キレル”子どもの心理的メカニズムに関する一考察」『山口大学教育学部研究論叢』48(3), 109-121頁。
- 大石英史(1999)「現代の“ムカツキ”“キレル”中学生の心理」『山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』10, 107-118頁。
- 斎藤孝(1999)『子どもたちはなぜキレルのか』ちくま新書。
- 下坂剛・西田裕紀子・齊藤誠一・伊藤崇達・神藤貴昭・柳原利佳子・鶴田弘子・九木山健一・西田紀子・西村亜希子・夏本千春・坂本由佳・前川雅子(2000)「現代青少年の『キレル』ということに関する心理学的研究(1) ―キレ行動尺度作成および SCT による記述の分析―」『神戸大学発達科学部研究紀要』7(2), 1-8頁。
- 田中宏二・東野真樹(2003)「わが国における『キレル』という現象に関する心理学的研究の動向」『岡山大学教育学部研究集録』第124号, 79-85頁。
- 富田賢治(2002)「『突発性攻撃行動および衝動』を示す子どもの発達過程に関する研究―『キレル』子どもの成育歴に関する研究―」国立教育政策研究所内発達過程研究会。
- 和田志麻・加藤和生(2003)「『キレ』の素朴概念の質的分析」『九州大学心理学研究』第4巻, 177-186頁。

## 資料

### 回答者の皆さんへ

この質問紙は、最近の中学生の心の状態や傾向について調べるものです。従って、どのような答えが正しいとか、間違っているというようなことはありません。ありのままの心情を答えてください。

1. あなたの性別について、当てはまる数字に○印をつけてください  
(1 男・2 女)
2. あなたの所属を記入してください  
( \_\_\_\_\_ 中学校 \_\_\_\_\_ 年生 所属 )
3. あなたの年齢を記入してください・・・・・・・・・・ ( \_\_\_\_\_ 才)

### 「キレル」現象の意味についての設問 (全ての生徒が回答)

あなたにとって「キレル」とは、どのような意味ですか？自由に記述してください。

--

### キレル頻度についての設問 (全ての生徒が回答)

あなたは「キレた」ことがありますか？自分に最も当てはまると思う数字に○印をつけてください。

- 1 私は、一度もキレたことがない
- 2 私は、今までに何回かキレたことがある
- 3 私は、月に1～2回はキレル
- 4 私は、週に何回かキレル
- 5 私は、毎日のようにキレている

### キレた時の状態についての設問 (キレル頻度の設問で、「2」～「5」の番号に○印をつけた生徒のみが回答)

キレた時のあなたは、どのような状態になりますか？思い当たる範囲で記述してください。

--